

鶴窓会だより

題字：元会長 佐藤 輝康氏 書

発行

山形大学農学部鶴窓会

発行日 2019年12月20日

第26号

〒997-8555 鶴岡市若葉町1-23
山形大学農学部内

TEL・FAX 0235-28-2897

ホームページ kakusokai.net
E-mail kakusokai@kdp.biglobe.ne.jp

特集① コース再編とプログラム制の導入について…(P4)

特集② 入場無料!ご飯無料!
山形大学農場フェスティバルのご紹介…(P6)

特集③ 鶴窓会新潟県支部が発足…(P8)



山形県沖地震 酒蔵応援企画…(P12)



写真提供元：山形大学農場フェスティバル実行委員会 撮影者：土田貴文

著書の紹介

「もちど、食べたい」

山形大学農学部教授
平 智

みなさんは、1889(明治22)年に日本の学校給食が鶴岡で始まったといわれていることをご存じでしょうか。そうです。鶴岡市は「学校給食発祥の地」なのです。

今の時代を生きる日本人なら誰しもがお世話になったことがある学校給食。「なつかしい。おいしかった。」「好き嫌いがあつたので困った。」「昔はアレルギー対応なんてなかったぞ!」などと思いは人それぞれでしょう。でも、小中学生時代の思い出の何パーセントかは給食にまつわるもの、という実感にはほぼ異論がないのではないのでしょうか。

筆者と同僚の江頭宏昌教授がともにアドバイザーを務める「鶴岡まちづくり塾」では、もともと多くの人たちに鶴岡が学校給食発祥の地であることを知ってほしいと願って本書の制作を企

画しました。「大人にも見て読んで楽しんでもらえる、鶴岡の給食本」の刊行です。先行して発刊された小冊子の内容をさらに充実させる方向で、約一年かけて、ユネスコ認定の食文化創造都市・鶴岡で食に関係する多くの人たちの協力のもとに本書は完成を見ました。

主な内容は、①「存じ」アル・ケッチャーノの奥田政行シェフと櫛引の農家レストラン「知恵軒」の長南光さんによる学校給食の献立の提案、② 荘内藩酒井家の菩提寺、大督寺で始まったといわれる学校給食の歴史の解説、③ 鶴岡で始まった日本で最初の給食献立の紹介をはじめ、現在に至るまでの7つの時代の献立の再現と試食、それらのレシビの公開、④ 塾生と筆者が行く「学校給食センター探訪記」、⑤ 鶴岡の学校給食に食材を提供している生産者数人を取材した「給食食材生産者のヒミツを探る」、そして、⑥ 6人の塾生による「食の鶴岡給食座談会」。どうやら「給食の思い出は細部に宿る」らしいです。

みなさんも本書をネタにして、幼なじみや同級生、あるいは家族で、熱い給食談義を展開していただければと思います。



もちど、食べたい
鶴岡まちづくり塾編 /
メディア・パブリッシング
2017年3月20日発行 / 1,200円(税別)

「まるごとわかるイチゴ」

山形大学農学部教授
西澤 隆

近年、世界のイチゴ生産量は急激に増加しており、特に中国、トルコ、メキシコ、エジプトなど、比較的イチゴ栽培の歴史が浅い国々における栽培量が増加している。また、かつては高温・多湿な気候条件のため栽培が困難であった東南アジアにおけるイチゴ栽培も著しい増加傾向を見せている他、日本では主要輸出農産物の一つとして注目され、香港、シンガポール、タイなどを中心に日本産イチゴがスーパーに並ぶようになってきている。さらに近年では、

植物工場を利用したイチゴ栽培も開始されるなど、イチゴを取り巻く環境は従来に比べ大きく変化してきている。こうした背景を踏まえ、今回本書を執筆するに至った。

本書は、従来のイチゴの教科書に見られる生理・生態についての既述に加え、日本と世界のイチゴ品種について解説したイチゴ品種図鑑からなる。生理・生態については、2001年に誠文堂新光社の農耕と園芸から「知っておきたいイチゴの生理・生態」というタイトルで計6回のシリーズとして掲載された連載記事をベースとして加筆した部分と、我が国におけるイチゴ栽培の歴史や植物工場などの栽培技術を利用した最新のイチゴ栽培方法について記載した。また、イチゴ品種図鑑については、内外の研究者や地方公務員として活躍している卒業生各位等の協力を得て、現在国内外で栽培されている主要品種について解説した。

初版は2017年に出版されたが、その後2018年に中国語版が出版されている。本書はできるだけ専門用語の使用を避け、分かり易い既述に努めていることから、イチゴ栽培に携わる方々、農業技術指導や教育現場で活躍されている方々、野菜園芸



まるごとわかるイチゴ
西澤隆著 / 誠文堂新光社
2017年発行 / 2,200円(税別)



「中国語版」
全方位看草莓
西澤隆著 雷家軍他訳 / 中国農業出版社
2018年発行 / 80元



学を学ぶ学生や趣味でイチゴを育てている方々に参考になれば幸いです。

目次

会長挨拶 3
 齋藤 博行 (昭和45年農学科卒)

《特集》 4

①コース再編とプログラム制の導入について
 渡部 徹 4

②入場無料! ご飯無料!
 山形大学農場フェスティバルのご紹介
 佐久間 拓也 6

③鶴窓会新潟県支部が発足
 加茂田 俊則 (昭和48年林学科卒) 8

退職に寄せて 9
 高橋 孝悦

着任のご挨拶 10
 鈴木 拓史

第8回「山形大学ビーチサッカー大会」の開催 10
 堀口 健一

学生研究支援事業について 11
 百瀬 清昭 (昭和50年農学科卒)

山形県沖地震 酒蔵応援企画 12
 加藤嘉八郎酒造(株)
 羽根田酒造(株)
 富士酒造(株)
 (株) 渡會本店

会員の声 14
 桃崎 富雄 (昭和34年林学科卒)
 山崎 泰三 (昭和40年農学科卒)
 佐竹 孝 (昭和42年農学科卒)
 大谷 裕行 (昭和48年農学科卒)
 佐久間 裕 (昭和48年園芸学科卒)
 田澤 繁 (昭和52年農学科卒)
 伊藤 隆 (昭和56年園芸学科卒)
 榎田 暢美 (平成1年園芸学科卒)
 根岸 七緒 (平成3年農学科卒)
 山田 秀之 (平成4年林学科卒)

岩崎 泰造 (平成5年農学科卒・平成7年農学研究科終了)
 畠山 真紀子 (平成7年生物環境学科卒)
 今井 吉紀 (平成12年生物生産学科卒)
 飯田 憲司 (平成13年生物生産学科卒)
 花井 幸一 (平成13年生物生産学科卒)
 宮崎 大吾 (平成18年生物環境学科卒)
 矢代 直樹 (平成20年生物生産学科卒)
 中川 蘭美 (平成26年食料生命環境学科卒)

学生会員の声 26
 白井 拓也 / 菊田 将太郎 / 本間 瑞生

留学生の声 27
 MENG TONG

同期会 28
 尾花 健喜智 (昭和37年林学科卒)
 岩城 功希 (昭和38年農業工学科卒)
 三浦 秀光 (昭和48年農学科卒)
 鎌戸 直樹 (昭和51年農学科卒)
 山部 かおる (昭和57年農芸化学科卒)
 加来 伸夫 (平成4年農芸化学科卒・平成6年農学研究科修了)

支部報告 32
 北海道支部 村山支部 置賜支部 宮城県支部
 福島県支部 関東支部 関西支部

追悼 37
 平 智
 櫻井 陽子 (平成5年園芸学科卒・平成7年農学研究科修了)

討報 38
 事務局からのお知らせ 38
 令和元年度代議員会報告 38
 幹事及び代議員名簿 40
 平成30年度事業並びに活動報告 41
 令和元年度事業計画 41
 人事異動 41
 平成30年度決算・特別会計積立金決算 42
 令和元年度予算・特別会計積立金予算 42
 平成30年度就職状況 43
 編集後記・編集委員 43
 著書の紹介 44
 平 智 / 西澤 隆

会長挨拶



山形大学農学部鶴窓会
 会長 齋藤 博行
 (昭和45年農学科卒)

令和元年5月26日の代議員会で第10代目の鶴窓会会長に推挙・承認されました。まことに身に余る光栄なことです。今までの庄内支部でなく村山支部から初めて選出されたことに多少の戸惑いもありました。一方で、私自身は酒田市の出身ですから、庄内までの車移動にあまり抵抗がありませんでしたし、むしろ身近に感じていました。これまで、平成17年から鶴窓会副会長を務めてまいりましたので、会の活動を維持することは出来るかと判断し、お引き受けすることとした次第です。

設立が喫緊の課題です。鶴窓会の益々の充実のためにも、各県の会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

同窓会は、大学と社会の架け橋で、大学は「教育」「研究」と並んで、「在学生の社会参画、卒業生の人的交流」をより進化させることが必要になっていきます。在学生と卒業生との交流については、特に特別会員である大学教職員の皆さまのご協力を得ながら卒業後も大学との絶えることがない関係性の構築をお願い申し上げます。

平成16年4月から国立大学法人になつてからは、学長と理事からなる「役員」は外部有識者が半数を占める運営協議会で経営方針の全てを決定することになります。経営目標は①自然と人間の共生、②充実した人間教育、③社会との連携重視が掲げられています。法人化によって、一番影響が大きかったのは、大学の予算は国からの運営交付金のほかに、教員自らが、外部資金等による資金獲得によって研究費を賄う必要が拡大できなかったことです。事業収入が拡大できない場合は、業務の縮小をせざるを得

ません。法人化以降、山形大学全体で国からの交付金は毎年1億円ほど削減され続けているとこのことで、今後も外部資金の獲得は大きな課題となつていきます。

教育の理念よりも経営評価に重きを置く状況では、経営効率の悪いところの学部は、学科再編の対象になる訳です。まさしく、文化的な教育、基礎研究分野の切り捨てと言えましょう。農学部は、その学術的傾向から工学部や医学部より企業等からの外部資金獲得が不得手と言わざるを得ません。果たして、これで充実した人間教育ができるのか不安になります。

一方で、母校が国立大学法人になつて新たに設立されたのが、全学部の学生、教職員、卒業生を会員とする校友会です。

平成17年の校友会設立時(前々任の帯谷会長の代)に依頼があり、校友会の理事を14年間務めてきました。おかげで、各学部の同窓会運営の実情や活動について知見を得ることができました。

校友会には卒業生支援事業もあります。この事業制度を活用すれば、鶴窓会各支部総会の折に母校の恩師を招いて最新の研究紹介をして頂くこともできます。支部総会に若い人の参加が増加するかもしれませんので実現したいものです。

鶴窓会会則の目的に「会員相互の連絡を密にし、親睦をはかり、農学部の発展に寄与すること」とあります。「農学部の発展に寄与すること」は、平成17年に追加した事項です。

鶴窓会の学生研究支援事業もそうした「農学部の発展に寄与すること」を狙いとした取り組みです。これが、企業や研究機関との共同研究に発展して外部資金の獲得に発展できれば良いと考えています。ぜひ鶴窓会ホームページの事業応募方法をご覧ください。応募いただきましたら、ようお願ひ申し上げます。

地方創生において大学が果たす役割は非常に大きく、人と産業経済をその地域に定着させて継続的に維持拡大させていくことが地方大学には求められるのではないのでしょうか。大学がある都市では、18歳から22歳までの若者人口が一定数確保できま

すので、活力が感じられます。さらに外国人留学生や研究者を集積させれば都市の国際性を高めることができますし、地域の子供達へ良い刺激になるでしょう。

入学後に学生の能力資質を伸ばしている教育力の高い「面倒見が良い大学」の全国評価が行われています。母校が上位にランクすることを期待したいと思います。

令和元年10月24日記

